

王である主は聖なる神、しかも赦す神

99 編を読んで、まず心に残ることは「主は聖なる方」(3, 5, 9 節) の繰り返しであろう。「王」の即位も繰り返し登場するので、「王である主は聖なる方」が基本的メッセージか？ルドルフ・オットーの『聖なるもの』はが有名であるが、人に脅威をもたらす「異化作用」を持つもの(ヌミノーズ)が宗教感情の根っこであるという。むろん、古代ヘブライ信仰はそのような一般化を超えた処にある。単なる超絶の神ではなく、主は、呼ぶと答える、「彼らを赦す神」である。

1. 主 (Yahweh) は聖なる方

「聖」(qādōwōš) はイスラエルの神 Yahweh の際立った属性である。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主」(イザヤ 6:3 イザヤでは、神の聖性の象徴であるケルビムに並んで(あるいは別に)セラフィムが登場する)イザヤは「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は/万軍の主を仰ぎ見た。」と言う。神と人との超絶的「距離」感覚である。たぶん、山や木に注連縄(しめなわ)を飾るような多神教、アニミストの日本人の全く理解できない神なのであろう。

人はこの神のみ前で震え上がる！ここでは「諸国の民ら」よ、慄けであり、「地」をして揺り動かすよ、である。全被造世界を包括する呼びかけである。

2. 王なる Yahweh mālāk

主がすべての民を支配する。この信仰は、この世の君主政を正当化する安易な「王権神授説」などを吹き飛ばす。主なる神が支配するという言明はあらゆるこの世の支配者を徹底的に相対化し、非神聖化し、批判する。神殿の贖罪所のケルビムたちの間に、あるいは、その上に主は座し給う。

3. シオン伝承 王の布告

主はシオンの丘エルサレム神殿に王座を構え、大いなる方、あらゆる民の上に「高く」います。「御名の大いなること、畏るべきことを告白せよ。主は聖なる方」(ここでは原語は「彼らをしてあなたの偉大で、畏るべき名を讃美させよ。公的に告白する、感謝する、賛美する)であり、「その名こそ「聖」であるとなる。神の聖はその威厳・尊厳において全被造世界を震撼させる中にある。

4. 主は裁きと恵みの御業を成し遂げる (4-5 節)

人と世界から超絶する神は人と世界に無関心、無関係ではなく、王として「力強く」裁きを愛し、「公平を固く定める」神は、神が選んだヤコブのただ中で裁きと恵みの御業を遂行する。「ミシュパート」を「愛される」(‘ahēb)。「義」がここでも一貫して新共同訳で「恵みの業」と翻訳されている。神の聖は、公平な審きとその義(恵みの業)の貫徹の中にある。

5 節は、礼拝共同体が、このような審きと義の神を賛美するように勧める箇所である。「我らの神、主をあがめよ。その足台に向かってひれ伏せ。主は聖なる方。」「あがめる」(引き上げる、高く上げる)。

一方で低くひれ伏し、他方で神を高く引きあげる対比である。目に見えない神は臨在の座を「足台」としているという。目に見えるのはその「足台」である。

5. 主を呼ぶと答えられた（6～8節） 「赦しの神」

神殿礼拝の司式者は「祭司」であり、（彼らはレビ族であり）、モーセとアロンの後継者である。預言者系列？で言えば「御名を呼ぶ者」はサムエルの流れであるが、彼らが主を呼ぶと、「主は彼らに答えられた。」モーセとアロンが祭司たちの中から、サムエルが呼ぶ者たちの中から彼らが彼の名 Yahweh を呼んだら、その「執り成しの祈り」に主は「答えてくれた」。神と信仰者の共同体はこうした神と神の民の「呼応」の関係にある。まことの王は民の叫びに答える者である。まことの王は民を無視、民に無関心ではない。

神はどのように答えられたか？ 臨在の幕屋の「雲の柱から」彼らに柱において、雲において彼は語った（文脈からすると幕屋ではなく、シナイ山のことか？）

この神の語りに、信仰者は神が彼らに与えた証を守られ、判断（定め）を守られたと理解した。確かに「我らの神、主よ、あなたは彼らに答えられた。」（答える、証を与える）

彼らを赦したひとりの神（彼らを持ち運び引き上げる、忍耐し苦難する神）。神は彼らの諸咎への復讐をしたにもかかわらず、NRSV「あなたは彼らを赦す神であったし、彼らの悪い行いには報復者であった。」

「ナーサー」は「担う」から由来し、担うから忍耐し、苦難する、そして、赦すという意味となることは信仰的に有難いことである。悪い行いには報復したにもかかわらず、赦し主である。あるいは、「救い主」であると「同時に」報復者なのだろう。「彼らの咎（業、乱用）には報いる（復讐、応酬する）神であった。」

こうして神の聖は、イスラエルの救済史、その赦しと報復において貫徹される。

6. 主をあがめ、聖なる山に向かってひれ伏せ（9節 ab）

「我らの神、主をあがめよ。その聖なる山に向かってひれ伏せ。」（すでに5節に登場している。高いこと、力強いこと。人やものではなく、主なる神を高くすること）。この神は「われらの神ヤハウェである。この方を高くせよ。そして「その聖なる丘で礼拝せよ。聖なる山に向かつてではなく、聖なる山（丘）で神を礼拝せよというのであろう。「主の祈り」は「あなたのみ名が聖とされますように」と祈る。イスラエルの信仰、特に、シオン伝承は礼拝の「場所」エルサレムに拘る。「礼拝する」（跪く、礼拝する）。聖公会などの会堂には跪く台がある。跪いて祈る。私はフットレストと間違っただけで足置いた失敗経験がある。

7. 礼拝の理由(9節 c)

なぜ、主なる神は、礼拝されるのか？それは、我らの神が、聖なる方だから。こうして、3、5、9節に「主は聖なる方」が繰り返され、この超絶したお方がイスラエルを担い、忍耐し、「赦す」神なのである。「聖なること」は神に向けられ、神の属性であるが、エルサレム神殿も「聖なるところ」とされる。ここにユダヤ教礼拝の限界があるか？キリスト者には聖なる場はイエス・キリストご自身である。「聖日」「聖餐式」など、「聖なる」という形容詞をこの世界のものに用いることをバプテストは避けてきたのではないか？ 神のみを聖とせよ！